



関西学院大学リポジトリ

Kwansei Gakuin University Repository

チャールズ・A・ブリッグスの異端審問とクライスト・セミネクス：アメリカ聖書学を決定づけた2つの事件

著者	大宮 有博
雑誌名	外国語外国文化研究
巻	18
ページ	165-176
発行年	2020-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10236/00028617

チャールズ・A・ブリッグスの異端審問 とクライスト・セミネクス

アメリカ聖書学を決定づけた2つの事件

大 宮 有 博

はじめに

一昔前、説教者の書棚に2つの辞書が必ずあった。それは BDB と BAGD と呼ばれていた。BDB とは『旧約聖書ヘブライ語英語辞典』のことで、この辞書を BDB と呼ぶのは3人の著者 Francis Brown-Samuel Driver-Charles Briggs の頭文字からである。また BAGD とは『新約聖書ギリシア英語語辞典』のことで、ドイツ語版の著者 Walter Bauer の B と、改訂者の William Arndt-F. Wilbur Gingrich-Fredrick W. Danker の頭文字からである。本稿を執筆する直接のきっかけは、2000年に大改訂されて BDAG となった辞書の D である Fredrick William Danker の肩書が “Seminary Seminex Professor of the New Testament at the Lutheran School of Theology in Chicago” となっており、私の当時の留学先であった Graduate Theological Union にも Robert Smith という新約聖書の教授が同じ Christ Seminary Seminex Professor の肩書を持っていたことにある（厳密には彼は Pacific Lutheran Theological Seminary 所属）。調べていくうちに Seminex（以下、セミネクス）というのが、アメリカの聖書学史においてエポックメイキングな出来事であったことがわかってきた。さらにユニオン神学校教授であるチャールズ・ブリッグスが長老派教会で異端審問にかけられたという出来事は、アメリカキリスト教史の

教科書で必ず取り上げられる。このブリッグスが BDB の 3 番目の B である。そう考えた時、この 2 つの出来事を検討すれば、アメリカ聖書学の事情を明らかにするのではと考えた。これが本稿執筆の直接の動機である。

そこで本稿は年代順にまず、チャールズ・A・ブリッグスに対する異端審問について、次にセミネクスのきっかけになった「コンコーディア神学校の反乱」(the “Revolt” at Concordia Seminary) について述べる。最後に両者の類似した点と、この 2 つの事件がどのようにアメリカ聖書学を特徴づけたかを論じる。

1. チャールズ・A・ブリッグスに対する異端審問

長老派はアンテベラム期に、リバイバルをめぐってオールドスクールとニュースクールとに分裂した。この分裂は北部・南部をまたぎ、南北戦争後も長く尾を引いた。オールドスクールとは、ウェストミンスター信仰告白を堅持し、リバイバルによる変化を拒否する保守的な長老派のことである。スコットランドあるいはスコット・アイルランド系の長老派はこの立場を取った。それに対してニュースクールとは、リバイバルを積極的に受け入れ、ウェストミンスター信仰告白の修正まで考えるリベラルな長老派のことである。イギリスあるいはニューイングランドのピューリタンの流れを汲む長老派はこの立場を取った。南北戦争前においてはニュースクールが南部・北部を問わず奴隷制廃止運動に積極的に関わった。南北戦争後もくすぶったオールドスクールとニュースクールの対立は、1869年に、ウェストミンスター信仰告白と長老制による教会制度を一致的に終結することになったが、対立は水面下で続いた。

チャールズ・A・ブリッグスは叔父の影響で長老派の牧師を目指した¹⁾。叔父はチャールズにオールドスクールの拠点プリンストン神学校を勧めたが、南

1) ブリッグスの生い立ちについては Gary Dorrien, *The Making of American Liberal Theology: Imagining Progressive Religion 1805-1905* (Louisville: Westminster John Knox, 2001), 337-344 を参照。

北戦争従軍経験からチャールズはニュースchoolの拠点校のユニオン神学校に進学した。この当時すでに、ユニオン神学校にはドイツから五書の資料仮説や第二イザヤ書研究が紹介されていたが、彼が本格的に聖書の「高等批評」を学んだのは1866年にベルリンに留学した際である。

留学から帰国し、しばらくニュージャージー州の教会で牧師として働いた後、ブリッグスはユニオン神学校に **Davenport Professor of Hebrew and Cognate Languages** として招かれた²⁾。彼はもともと「キリスト教の聖書と伝統の多様性に広がる神学的統一性」を発見することを試みた。この試みを彼は「聖書神学」と呼んでいた。この時も彼は「聖書批判と超自然的啓示とは一つ」と述べた。彼は **Davenport Professor** 就任講演（1876年9月21日）で、聖書の高等批評は数々の伝統的解釈を覆すだろうが、聖書が啓示であることを脅かすことはないと主張した³⁾。彼によると、カルヴァンにしてもウェストミンスター会議に集まった神学者たちも聖書が「唯一の誤りなき信仰と生活の規範」(the infallible rule of faith and practice) とするが「誤謬のない書物」とは言っていない。むしろ聖書に誤謬がないという立場の方が、聖書を偶像化していないかと述べた。

ブリッグスがユニオン神学校でのキャリアを開始した時期の長老派は、オールドスクールとニュースクールとの対立が下火になるにつれて、ファンダメンタリズムの影響が拡大した時期であった⁴⁾。オールドスクールにとってもニュースクールにとっても、長老派の伝統とは相容れないラプチャーやディスペンセーションナリズムを軸にしたファンダメンタリズムが長老派に拡大することは望ましいことではなかった。そこで1880年、このファンダメンタリズムに対抗すべくプリンストン神学校とユニオン神学校が共同編集で *Presbyterian Review* 誌（季刊誌）を発刊することとなった⁵⁾。ブリッグスがこの雑誌のユ

2) この後の彼のユニオンでのキャリアは様々な教授職を転々とする。

3) この講演の全文は <https://archive.org/details/addressbyrevchar00brigrich/page/n37/mode/2up> を参照。

4) George M. Marsden, *Fundamentalism and American Culture*, New Edition (Oxford: Oxford University Press, 2006), 109-118 を参照。

ニオン側の編集者となった。*Presbyterian Review* の共同編集は1889年10月号まで続いたが、聖書やウェストミンスター信仰告白の権威をどうするかをめぐる議論の場となった。

1888年、一部の中会から大会に対して、長老派の要であるウェストミンスター信仰告白の修正動議が出た。修正が求められた箇所は第三章の予定と選びについてであるが、提案者側はこれらの教理が時代に合っていないと主張した。これはオールドスクールの流れを汲む長老派にとっては衝撃的なことであった。プリンス頓神学校は修正反対の急先鋒に立った。ブリッグスは、この動議をめぐる論争において一つの妥協点を探る。すなわち、ウェストミンスター信仰告白は修正せずに維持し、時代にあった新しい教理箇条を制定するというものであった。しかし、このことで保守派の間にブリッグスに対する懸念が広がった。

ブリッグスに対する攻撃は1890年にブリッグスの講義に出席していた一人の学生がブリッグスの学問的聖書解釈に対する非難とともに講義ノートを長老派の超保守派の通信である *The Mail and Express* に送ったことにある⁶⁾。

この年ブリッグスは新設された Robinson Professor of Biblical Theology の教授職に就任することになり、翌年1891年1月の就任演説のテーマとして「聖書の権威 “the Authority of Holy Scripture”」を選んだ⁷⁾。講演では、例えば五書などの著者がモーセでなかったとしても、福音書の述べる奇跡が説明できなかったとしても、キリスト教が損なわれることはない、聖書の歴史的批判的研究を擁護した。そして聖書と教会と理性こそが神の権威の3つの源泉であるとの立場を打ち出した。人が教会や聖書ではなく理性によって神を見つけた

5) 全巻全文がデジタル化されている。<http://commons.ptsem.edu/?journal-id=presr> を参照。

6) この投稿をきっかけにして始まるブリッグス異端審問事件については Robert T. Handy, *A History of Union Theological Seminary in New York* (New York: Columbia University Press, 1987), 70; Dorrien, *The Making*, 358-36 が詳しい。

7) この講演の全文は https://books.google.co.jp/books?id=3yEHZw3tAigC&printsec=frontcover&hl=ja&source=gbg_summary_r&cad=0#v=onepage&q&f=false を参照。

しても、教会や聖書は手だてであって目的ではなく、神に至る道であって神ではない。この講演は聖書と理性を同列にならべるもののように聞こえる。したがって超保守派のみならず穏健な長老派の牧師のなかにも彼の考えに疑問を持つものが出始めた。

1892年の長老派大会はブリッグスに対する異端審問と同時に、ユニオン神学校に対する圧力をかけ始めた。長老派は自派の神学校の人事に対する拒否権を持っていた。異端審問は2度にわたって行われ、1893年の大会で決議された。ユニオン神学校の教員たちは、このことに抗議して長老派から独立して、教派を超えた神学校となる決議を行った。そしてコロンビア大学やニューヨーク大学との関係を強化し、より高度な神学研究機関へと様変わりし、同時にブリッグスに同調的な長老派中会や会衆派、バプテスト教会の牧師養成を担うようになった。このユニオン神学校を支えたのはロックフェラー家などの富豪や財団の寄付によるものである。ユニオンの財政は、長老派との関係がなくなっても、1970年代までは盤石であった。

ブリッグスは翌年の決議の確定後、聖公会に転籍し聖職按手された。同僚であるフランシス・ブラウンや旧知のサミュエル・ドライヤーとともに1906年に『ヘブライ語英語辞典』の出版をした。それとともに **International Critical Commentary Series** の編集も開始した。このような研究上のキャリアとともに、これ以降の彼の働きで特徴的なのは、プロテスタントとローマ・カトリックの間の合同をかなり真剣に模索したことも挙げられる。

2. クライストセミナリー・セミネクス

先述のブリッグス異端審問事件は、多くのアメリカキリスト教史や神学史の教科書に大きく取り扱われる。それに対して、次に扱うクライストセミナリー・セミネクスを取り上げるアメリカキリスト教史の教科書は少ない。その理由として、まず、この事件が起きルター派教会ミズーリ・シノッドがそれほど大きな教派ではなかったことが挙げられる。また事件自体も地方の一つの神

学校で起きた小さな「反乱」と思われていることもある。しかしこれから述べるように、この事件は後のアメリカ聖書学に大きなインパクトを残している。

まず、ルター派教会ミズーリ・シノッドの歴史について説明する。1840年代、ドイツやスカンジナビア（ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、デンマーク）からアメリカ合衆国への移民の数が急増する。彼らの多くは農民であり、広大な土地を求めて中西部に飛び込んでいった。彼らは当初、自分たちの伝統と言葉を礼拝で守るためにルター主義の教会を建てたが、一つの教派を形成するには至らなかった⁸⁾。そのなかでもドイツ人によるルター派教会は、早くも1839年にミズーリ・シノッド（管区）を結成し、中西部の中核都市であるセントルイス近郊に、シノッド本部やコンコーディア神学校が建てられた。当初は礼拝や連絡などもドイツ語によることが多かった。

ドイツからアメリカにきたルター派教会の指導者たちは例外なく、「アウグスブルク信条」やルターの「小教理問答」などに忠実な伝統的立場を取り、リッチュルやシュライエルマッハーといった自由主義プロテスタンティズムに反発する人々であった。移民の第二世代は、それまでのドイツ語による「信条」や「小教理問答」を英語に改め、積極的な伝道を進めるなど「アメリカ化」を進めた。しかし他のルター派教会と違ってミズーリ・シノッドは、アメリカ化の過程にあっても伝統主義あるいは信条主義と言われる立場を貫いた。ところが20世紀に入るとミズーリ・シノッドの信条主義も、ファンダメンタリストという「アメリカ的」な傾向に染まってきた⁹⁾。

1970年代に入るとミズーリ・シノッドは6200の教会、280万人の信徒数で、

8) ルター派の教会が教派を形成するようになったきっかけは、第一次世界大戦中の反ドイツ・プロパガンダが高揚するなかで、アメリカ文化への同化と同時に自分たちの宗教的アイデンティティを形成する必要性が生じたからである。1917年にノルウェールター派教会（the Norwegian Lutheran Church）が、1918年に連合ルター派教会（the United Lutheran Church）が結成された。1930年には the American Lutheran Church が結成された。

9) Marsden, *Fundamentalism*, 195.

合衆国のルター派としては2番目に大きい教派であった¹⁰⁾。また海外にも宣教師を派遣する力を持っていた¹¹⁾。ミズーリ・シノッドの特徴は独自の教育システムであった。1200近い小学校に150,000人の小学生が通っていた。小学校の数ではカトリックの次と言える。また35の中学・高等学校、いくつかの大学があり、さらに2つの神学校があった。

ところでコンコーディア神学校はミズーリ・シノッドの牧師を養成する神学校の一つであった。言うまでもなくルター派の信条に基づいた神学が教えられていた。しかし1960年代に入り、退職した教員に入れ替わって入ってくる教員は、学問的かつ「リベラルな」立場を取った¹²⁾。その傾向は釈義神学部門 (the Department of Exegetical Theology) に顕著であった。授業の内容はそれまでの神学的なものから歴史的批判的なものへと移っていった¹³⁾。1969年5月にジョン・ティーティエン (John Tietjen) が学長 (President) になり、コンコーディア神学校のリベラル化は外部に明確に示された。

ファンダメンタリストの影響を受けたミズーリ・シノッドの信徒や牧師は、「誤りなき聖書の権威」を公準として、史的批判的方法による聖書学を教える神学校教員に対する監視と批判を行うようになった。この監視の中でシノッド内に設置された事実確認委員会 (Fact-Finding Committee) がコンコーディア神学校の神学教育に関する報告書を公表 (160ページ)。前述の事実確認委員会の報告書は、講義要項や教員に対するインタビューをもとにコンコーディア神学校の教育を検証している。インタビューの内容は聖書の無謬性、聖書の著

10) ここに記載された数は James E. Adams, *Preus of Missouri and the Great Lutheran Civil War* (New York: Harper & Row, 1977), 15-16 を参照。

11) 日本には1948年に宣教開始を宣言、現在の日本ルーテル教団のルーツとなる。

12) The Board of Control Concordia Seminary, *Exodus From Concordia: Report on the 1978 Walkout*, 1977, 13. 私的なパンフレットとして配布された。論者はこのパンフレットを Lexington Theological Seminary 図書館で見つけた。パンフレットには写真などが含まれる。

13) 事実確認委員会が作成した報告書 *Report of the Synodical President to the Lutheran Church-Missouri Synod* (1972) には、釈義クラスの授業要綱の変遷などが例として挙げられている。論者はこの報告書を Asbury Theological Seminary 図書館で見つけた。

者問題、奇跡、天使論、キリストの処女降誕、キリストの肉体的な復活など明らかにファンダメンタリズムが焦点化してきた問題である。ここにはルター派の伝統よりもファンダメンタリズムの影響が強く伺える。この報告書に基づいてシノドの理事長 J.A.O. プレウスは、同神学校がミズーリ・シノドの信仰告白に合意した神学を教えていないこと、とりわけ聖書の権威の尊重に欠けるところがあると断じた。

翌年の総会ではコンコーディア神学校の教員の多くが「聖書のみ」の原理を守っていないという非難を決議された。1974年1月、ミズーリ・シノドの指導者が過半数を持つ理事会は、ティーティエンの学長権限を停止した。これにより教員と学生の間でコンコーディア神学校からの「亡命」(Exile)が協議され、その決行の日として2月19日が選ばれた。

ティーティエンによると、「亡命」の日すなわち2月19日、ほとんどの学生と教員が集会に集まった¹⁴⁾。手には両面のチラシが持たれていた。この紙の表には2月19日までに教員と学生が授業を再開することを求める管理委員会の最終勧告が、裏には学生コーディネート委員会の声明が印刷されていた。教員の側から「セミネクスは新しい神学校でも教育機関でもなく、これはコンコーディア神学校内にあるが亡命中 (in exile) にすぎない」こと、ほとんどの授業がセントルイス大学 (イエズス会) とイーデン神学校 (合同キリスト教会) で行われることの説明があった。11時15分に学生は選挙を行い、ほとんどの学生がコンコーディア神学校から「亡命」する方に投じた¹⁵⁾。そして亡命を決めた学生と教員は、「神はわがやぐら」を讃美しながらキャンパスを出た¹⁶⁾。

コンコーディア神学校理事会は、「亡命」を宣言した教員を解雇し、学生を

14) 当日の様子については John H. Tietjen, *Memoirs in Exile* (Minneapolis: Fortress, 1990), 209-12 を参照。

15) 教員は50人中45人、学生は381人中274人が「亡命」を決意した。

16) ティーティエンの報告とは異なり、管理委員会報告によると学生の多くはこの後寮に戻り食事をした。また、「亡命中」教員の中には転居先が見つからず、「亡命」から半年以上たっても家賃を払って教員住宅に暮らし続けるものもいた。The Board of Control Concordia Seminary, *Exodus From Concordia*, 129-130.

除籍した。そのうえで神学校を去っていた教員の粋を教派への忠誠を誓う教員によって埋めた。これによって教派の保守派の信頼を得て安定した資金を教派から確保することができた。学生数も80年代までには、事件前以上の数に増加した。学生が歴史的批判の方法で聖書を研究することは可能ではあるが、聖書に書かれている重要な点に関して誤りがあると主張することは、卒業時に牧師になる道を閉ざしてしまう可能性もある。

事件後のミズーリ・シノッドの保守化は鮮明になった。ミズーリ・シノッドは、エキュメニカル運動や社会運動とは一線を画す独自の路線を保つものの、神学的・倫理的な立場では「疑似ファンダメンタリスト右派」(quasi-fundamentalist theological right) の圧力を受けている¹⁷⁾。例えば妊娠中絶についてはファンダメンタリストと全く同じ立場を取っている。他方、この事件の後、ミズーリ・シノッドから約10万人の信徒を含む200教会が離脱し¹⁸⁾、福音派ルター教会同盟 (the Association of Evangelical Lutheran Churches) を結成した。さらに1988年、よりリベラルなルター派教会 (例えば the Lutheran Church in America など) と合流し、アメリカ福音ルター派教会 (the Evangelical Lutheran Church In America) を結成した。

コンコーディア神学校を「亡命した」教員と学生は「亡命中のコンコーディア神学校」(Cocordia Seminary in Exile) あるいはその略称としてセミネクス (Seminex) を名乗った。しかし「コンコーディア」の名称使用の差し止めの要求を受け、クライストセミナリー・セミネクス (Christ Seminary-Seminex) に名称変更した。この事件の後にミズーリ・シノッドから離脱した約250の教会によって結成された福音派ルター派教会連合 (the Association of Evangelical Lutheran Churches) と関係を持ちながら、独自のキャンパスをセントルイスに設置した。セミネクスは1982年に教員を3つのルター派の神学

17) Robert Benne, *The Paradoxical Vision: A Public Theology for the Twenty-First Century* (Minneapolis: Fortress, 1994), 141.

18) この数は “Lutheran’s Missouri Synod Healing from Bitter Political Dispute of 70’s” New York Times (December 13, 1982) 参照。

校¹⁹⁾に移し、その教員の給与はセミネクスがしばらく支払い続けた²⁰⁾。この動きの背景には、福音派ルター派教会連合と他のよりリベラルなルター派との合同の協議が進んだことがある。1987年には完全にそれらのルター派神学校に吸収された²¹⁾。

3. 2つの事件から考えられるアメリカ聖書学の特徴

アメリカの聖書学はドイツとは違った独自の発展を遂げた。最大の特徴は、新約聖書学において伝承史・編集史を必須の知識としていないことである。1990年代のアメリカの神学部・神学校の修士レベルの新約聖書学入門の代表的教科書は、執筆年代や場所といった緒論の後に各書の文学的な説明が続くというスタイルである²²⁾。また、博士課程においても社会学、社会史、文化人類学の手法を取り入れる釈義のセミナーがあっても、伝承史・編集史を指導教員から手ほどきを受けることはあまりない。

このような独自の発展を遂げている最大の理由として、アメリカでは神学の

- 19) シカゴ・ルター派神学校 (the Lutheran School of Theology at Chicago, LSTC)、太平洋ルター派神学校 (Pacific Lutheran Theological Seminary, PLTS)、ウォルトブルク神学校 (Wartburg Theological Seminary, WTS)。
- 20) "Lutheran's Missouri Synod Healing from Bitter Political Dispute of 70's" *New York Times* (December 13, 1982).
- 21) 聖書学に限ってその転任先を述べる。Ralph Klein (旧約) → LSTC、Everett Kalin (新約) → PLTS、Robert Smith (新約) → PLTS、Edgar Krents (新約) → LSTC、Frederick Danker (新約) → LSTC。いずれも20世紀のアメリカ聖書学を代表的な聖書学者であり、これによってルター派神学校の聖書学の質も飛躍的に向上した。とりわけ Frederick Danker は、パウアーの翻訳による『新約聖書ギリシア語英辞典』の第一版 (BAG, 1957) と2版 (BAGD, 1957)、そして Danker のみによる大改訂3版 (BDAG, 2000) に携わった。彼の業績はギリシア語辞書に凝縮されていると言っていい。皮肉なことではあるが、彼の改訂した辞書 (BAGD) は、ファンダメンタリストの間でも用いられている。
- 22) 90年代の代表的な幅広く様々な神学校で用いられている教科書として Luke Timothy Johnson, *The Writings of the New Testament: An Interpretation* (Philadelphia: Fortress, 1986, 1999[2], 2010[3]) を例として挙げる。この教科書のスタイルがまさに各書の文学的解説を軸にしたものである。

研究と教育は主に教派の牧師養成を目的とした神学校（seminary）で担われていることが挙げられる。それらの神学生にとって、神学は牧師になるためのツールである。多くの神学生は神学を学ぶためではなく、牧師となるための訓練を受けるために神学校に入る。彼らが期待するのは、学問的な授業ではなく、もっとプラクティカルなものである。そのため高度に学問的な授業は、しばしば学生の失望と怒りの対象となる。聖書学に関しても聖書を歴史的視点から学ぶよりも、文学的に学ぶことで教会の説教をしたり聖書研究会を指導したりするためのテクニックが求められる。また聖書学はしばしば教派の教理に脅威を及ぼしかねないものとして、教派から警戒されることが多かった。こういったことは、本稿で取り上げた2つの出来事からも明らかである。

アメリカ聖書学が独自の発展を遂げている第2の理由として、ファンダメンタリズムの存在が挙げられる。本稿で取り上げた2つの事件は、長老派あるいはルター派の伝統にファンダメンタリズムが影響を強く及ぼした結果である。ファンダメンタリズムの影響を受けた人々は、教派や教会を離脱するのではなく、その教派や教会をファンダメンタリズム化しようとする傾向がある。そもそもファンダメンタリズムはモダニズムの影響からアメリカのキリスト教や伝統的なライフスタイルを守ることなので、伝統的な教派を離脱して独自の教派・教会を形成するのは本末転倒である。とりわけドイツ移民の素朴な信仰のよりどころであったミズーリ・シノッドにとって、ファンダメンタリズムの主張を受け入れることは教会の「アメリカ化」であった。ファンダメンタリズムを主張するキリスト者の教派内での存在は、教派神学校に伝承史・編集史を軸とする聖書学の拡大を抑制する力となった。

結び

このように時代や教派の異なる2つの神学校の事件を取り上げることによって、アメリカ聖書学が持つ特徴——例えば、ドイツで発展した伝承史・編集史的研究を避け、文学的・修辞学的研究に重きを置くこと——の理由の一つを明らかにした²³⁾。ブリッグス事件では、ユニオン神学校が超教派神学校 (interdenominational seminary) として学問的聖書学を維持する道を選んだ。コンコーディア神学校はリベラルな教員と学生を「亡命」した後、教派に忠実な教員による牧師養成の道を選んだ。アメリカでは聖書学の研究者は、ユニオン神学校のようなリベラルな超教派神学校や、ハーヴァードやシカゴ大学といった教派と独立した大学の大学院で主に養成されている。これらの大学で学ぶ博士課程の学生も、とりわけ新約聖書学に関して言うと、伝承史・編集史的研究よりは文学批評を用いた研究、あるいは西洋古典学や古代中近東学、ユダヤ学、人類学といった学際的研究に関心を持ち、その領域での研究が盛んである。

23) アメリカ聖書学のこのような傾向のもう一つの理由として、ドイツのギムナジウムでは古典語や西洋古典学が大切にされているが、アメリカの大学ではそのようなことはない。それに対して、アメリカでは文学批評を学ぶ **English 101** が必修であることが挙げられる。アメリカの学生にとって文学批評は文学を読む身近なツールなのである。